

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月28日)

授業者：〇〇

範囲：グローバル化と経済

主な感想・代案

- 資料のビジュアルに配慮していることがよく分かりました。豊富に資料が用意されており、BRICS について考えるワークでも、資料を吟味して配布していることが感じられました。
 - BRICS を言わせる場面は、工夫が少なすぎるように思いました。完全に勘で当てさせるような状況になっており、China などが出てこない可能性なども考えると、現状の準備では厳しいと思います。
- 私なら、この 5 文字が国の頭文字であるといった上で、頭文字がこの後文字の国を資料で多く列挙して、その中から数度しか選べないという条件のもと、生徒に選ばせます。その際に「新興国」と呼ばれる条件などについても説明しておき、できるだけ生徒の既有知識で推理で切るように促します。
 - グローバル化の存在は、ある意味生徒にとっても当たり前のもとなっていると思います。それこそ、地理でも歴史でも学んでいるかもしれないし、公民でも前半の範囲で扱っています。だからこそ、今回の授業範囲で何を教えること・何を分かってもらうことが大切なのかという点が重要になってきます。ただ、現状では、この授業ならではのこだわりが感じにくかったというのが私の感想です。
(そういう意味では、地理での既習事項との比較ができていると良いかもしれません)

→ 私なら、この時間は「日本の経済とグローバル化」というところに焦点を当てて授業構成をしたいと思います。グローバル化一般にしてしまうと、他と似てくるので。その際に、できれば何か具体事例に即して考えられる授業がいいなと思う。例えば、Amazon を例にしましょう。導入では、Amazon の利用がどれだけ便利かを説明した後に、それによって倒産したと思われる本屋さんや商店街などの話をします。主発問は、「グローバル化は私たちの生活や日本の経済をどう変化させるのか？」にします。展開では、TOYOTA がアメリカでも工場があるという話だけでなく、部品のほとんどが海外で作られている話をします。それによって、安くなる車と、雇用を失う人々の話をし、グローバル化の光と影について、少し講義をします。

→ 展開の後半では、グローバル化に対する新しい取り組みを少し紹介する。一つは完全に効率化をしていくグローバル化の時流に乗る取り組み。もう一つは、グローバル化の時代だからこそ、地産地消を売りにした農業の取り組み。その上で、「これからの時代にどちらの取り組みが広がっていくことが好ましいと思いますか？」と尋ね、その意見を共有します。

【コラム】理論と実践の接点

グローバル化という現象は、ある意味でテクノロジーの発展とも似ており、私たち自身がその影響をどれだけ受けているのかを意識できていない部分があります。実はいつも影響を受けているのだけど、本人は意識していない。こういった問題に向き合う際に、福田は、「その学習がグローバル化現象のカタログ展示に終わるのではなく、子どもがグローバル化の動因を探求し、説明できるようにしなければならぬ。そのためには、前述したように経済システムからグローバル化を捉え、体系化する必要がある」と述べています。この授業がともすると、グローバル化現象のカタログ展示に終わっていないかについては、もう一度振り返る必要があるように思います。個人的には、グローバル化を説明した書籍や経済学の本などを読んで、それを分かりやすく説明するというアプローチが良いように思います。

【参考文献】福田正弘(2012)「社会科教育とグローバル化」社会認識教育学会『新 社会認識教育学ハンドブック』明治図書。